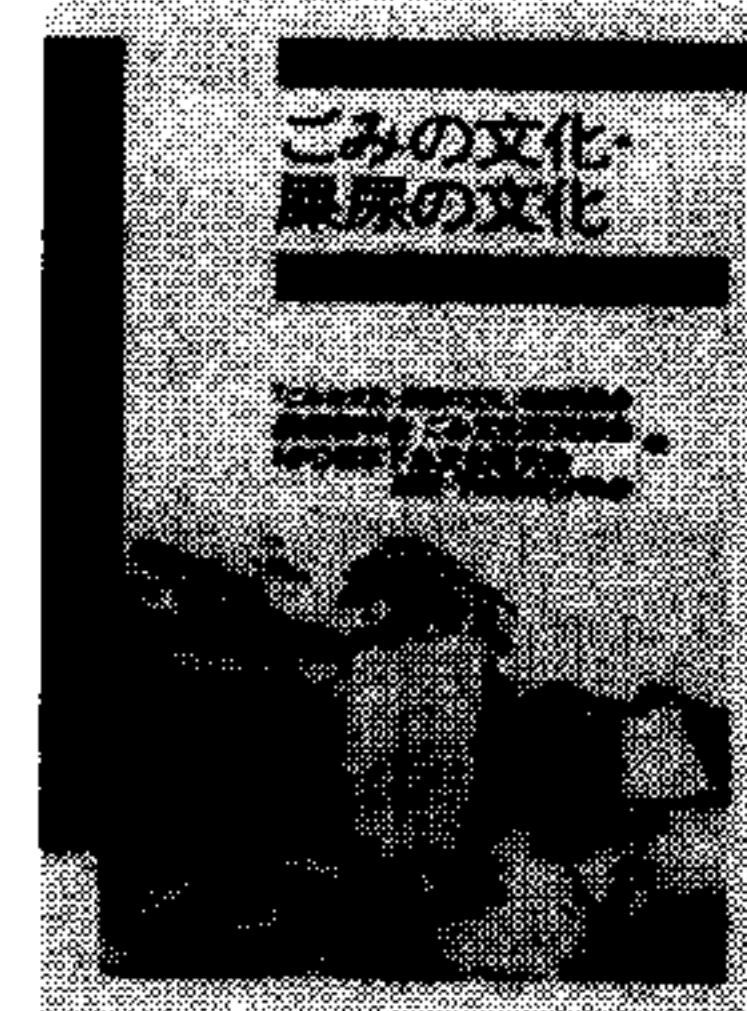


【書 評】

『「ごみの文化・屎尿の文化」編集委員会
 廃棄物学会ごみ文化研究部会・NPO日本下水文化研究会 編： ごみの文化・屎尿の文化』

大阪市立環境科学研究所 山 本 攻

この本の中ほどに、「トイレについて考えることは文化を考えることである。排泄行為および排泄物への対し方は、それぞれの民族や文化によって違ふし、その文化的位置づけも異なるものなので、文化人類学の対象に十分なるのである。」という引用がある (p.175)。トイレには、神様がいて、民話があって、マナーがあって、用具があって、人形があれば、研究対象として十分に魅力的である。



この本は、ごみや屎尿、トイレに興味を持った方々が、分担して執筆された本である。目次を紹介すると、プロローグに始まり、ごみの文化史、屎尿の文化史、ごみと屎尿の技術史、トイレの文化史、有価物から廃棄物へ、人物誌、発展途上国における屎尿事情と、幅広い分野を取り上げている。しかも、一話一話の読みきり形式となっているため、内容が把握しやすく、これ一冊でごみと屎尿に関する様々なこと知ることができる。はなしシリーズとして出版されたものであるが、まさに、ごみと屎尿のはなしとして好著である。

執筆者であるが、ごみに関しては、廃棄物学会のごみ文化研究部会、屎尿に関しては、日本下水文化研究会の屎尿・下水文化研究分科会のメンバーである。プロローグにおいて、会の発足の事情も紹介されている。

本の内容は、書評者が身近に感じているごみに絞って紹介する。

プロローグでは、ごみの文化史でも紹介されている使い捨てについての他、江戸時代の灰問屋のはなし、宗教的行事とごみとの関係、万物に神宿るといふ古来からの意識など、本文には載せきれなかったと思われる点に触れられている。

ごみの文化史では、何気なく使っている「ごみ」という言葉の由来から始まり、日本の歴史に添った形で、話題が提供されている。近年の考古学の成果がとりいれられており、中世の日本に使い捨ての風習があったことをはじめ教えられた。江戸は浪費とリサイクルが共存していた不思議な町であること、江戸近郊ではごみの発酵熱を利用して促成栽培が行われていたこと、など興味深い話が乗せられている。

ごみと屎尿の技術史では、準好気性埋立方式が確立される話や海外にまで広がっていることが紹介されている。人物誌では、ごみ焼却の先駆者である岩橋元亮の足跡が紹介されている。

ただ、このように紹介すると、ごみの部分が弱いことがやや残念である。屎尿に関しては著作も多く、トイレでは博物館まで作られている。情報量に圧倒的な差がある。

冒頭に書いたように、排泄は人にとって基本的な行為であるがあまり美的なものではなく、これをいかに「人らしく」するか、ということには、古代から色々とり組まれてきたようである。ごみは、「捨てる」という行為から生まれるものであるが、これは人の基本的行為というよりはその周囲あたりに位置するものであろうか。物が少なかった昔には、捨てるという行為はモラルもルールもそれほど必要なかったため、トイレのような文化が育たなかったであろうか。プロローグで触れられている針供養や人形供養は文化なのであろうか。物があふれかえる現在、捨てることも文化人類学の対象になりつつあるのだろうか。このあたりは、今後の研究テーマとして、期待しておきたい。

書 名：ごみの文化・屎尿の文化

ISBN 4-7655-4448-6 B6判 232頁 定価 ¥2,200 + 税 2006年発行

編 者：「ごみの文化・屎尿の文化」編集委員会・廃棄物学会ごみ文化研究部会・NPO日本下水文化研究会

発行所：技報堂出版(株) 〒101-0051 東京都千代田区神田保町1-2-5 TEL 03-5217-0885 FAX 03-5217-0886